我が国の motivational strategies の研究動向の概観：CiNii データベースを用いたシステマティックレビュー

田中博晃
近畿大学

An Overview of Research Trends in Motivational Strategies in Japan: A Systematic Review Using the CiNii Database

Tanaka, Hiroaki
Kindai University

Abstract

本研究の目的は, システマティックレビューの手法を用いて我が国の英語教育分野での motivational strategies の研究動向を把握た上で, それらの研究成果を統合する試みを行うことである。国立情報学研究所の CiNii データベースから抽出・スクリーニングした過去 10 年（2023 年～2014 年）に発行された英語教育分野の motivational strategies に関する論文を 11 編を分析した結果，我が国で最も多く行われた motivational strategies の研究は「実践の省察と提言」で, 研究対象はすべて大学生だった。motivational strategies の有効性を評価した研究は 3 編で，それらすべてで Dörnyei (2001)の motivational strategies が用いられていた。これらの研究結果を統合した結果，日本人大学生にはグループやクラスの雰囲気作りという基礎的な環境を創出する motivational strategies，教育課程，学習事項，教材，タスク，アクティビティなどを学習者の内在的な目標などの実用価値と関連づけることで, 学習者の興味関心をひくという motivational strategies の有効性が高いと考えられる。

Keywords: *motivational strategies, systematic review, CiNii*

1. はじめに

近年の外国語教育分野での動機づけ研究は大きく分けて 6 つの方向性で議論されている（Dörnyei, 2020）。それが，(1)「動機づけ理論の概念整備」，(2)「ダイナミックス」，(3)「教育場面への理論の応用」，(4)「無意識/意識下」，(5)「L2 motivation self system に代表されるビジョン」，(6)「長期的な持続性」，である。Boo, Dörnyei, and Ryan (2015) は，外国語教育研究分野での動機づけ研究の動向をより詳細に調査するため，2005 年から 2014 年までに出版された 415 本の主要な動機づけ研究の論文を統括レビューした。

その結果，415 本のうち約 3 分の 1 に該当する論文が「動機づけ概念」（motivation）ではなく，学習者を「動機づけること」（motivating）を扱っていたことが明らかになった。つまり，上述の 6 つの研究分野の内，(3)の「教育場面への理論の応用」が外国語教育研究における動機づけ研究の主要なテーマの中でも活発に研究されていると言えよう。特に理論を実践に応用する具体的な研究テーマとして着目されているのが，「授業で教師が学習者の動機づけを高めるための具体的な授業テクニック」（Dörnyei, 2001）と定義される *motivational strategies* である。

そこで本研究では，motivational strategies に関する我が国の研究動向についてシステマティックレビューを用いて概観することで，現状での我が国の motivational strategies の研究成果がどのように集約できるのか議論したい。

2. 研究の背景

2. 1 motivational strategies について

まず motivational strategies の訳語について，motivational strategies を外国語教育研究の分野に導入した Dörnyei (2001)の翻訳書では「動機づけを高める英語指導ストラテジー」（ドルニェイ，2005）とされている。しかしストラテジーという表現は「学習ストラテジー」（*learning strategies*）を想起させることもあり，訳語が統一されているわけではない。他にも「動機づけを高める方略」（例えば，田中, 2010; 2013）などもあり，近年は「動機づけ方略」が多用されている（例えば，廣森 2011; 2014; 竹内, 2016）。のちに詳述するが，本研究はシステマティックレビューの手法を用いて CiNii に登録されている論文を抽出するため，motivational strategies の多様な訳語を検索語として使用した。よって，この論文内で motivational strategies について記述する際は，検索語との混乱を避けるために，英語表現の motivational strategies をそのまま使用する。

motivational strategies を最も体系的に研究した文献として Dörnyei (2001)が挙げられる。Dörnyei (2001)は Dörnyei & Csizér (1998)が実証的な研究手法を使って提示した 10 個の motivational strategies をさらに拡張させ，心理学で提唱された動機づけ理論をベースに 35 個の motivational strategies（Appendix 参照）を創出した。その上で，それら 35 個の motivational strategies を授業実践場面を想定した 4 つのカテゴリーに分類した process oriented model を提示した。4 つのカテゴリーとは，「動機づけの基礎的な環境の創造」（*creating the basic motivational conditions*），「学習開始時の動機づけの喚起」（*generating initial motivation*），「動機づけの維持と保護」（*maintaining and protecting motivation*），そして「肯定的な回顧的自己評価の促進」（*encouraging positive retrospective self-evaluation*）である。Dörnyei (2001)によると，motivational strategies には場面カテゴリーに準じた特性があり，process oriented model は 35 個の motivational strategies を適切な使用場面に応じて 4 つの段階に分類した点が特徴である（図 1 参照）。

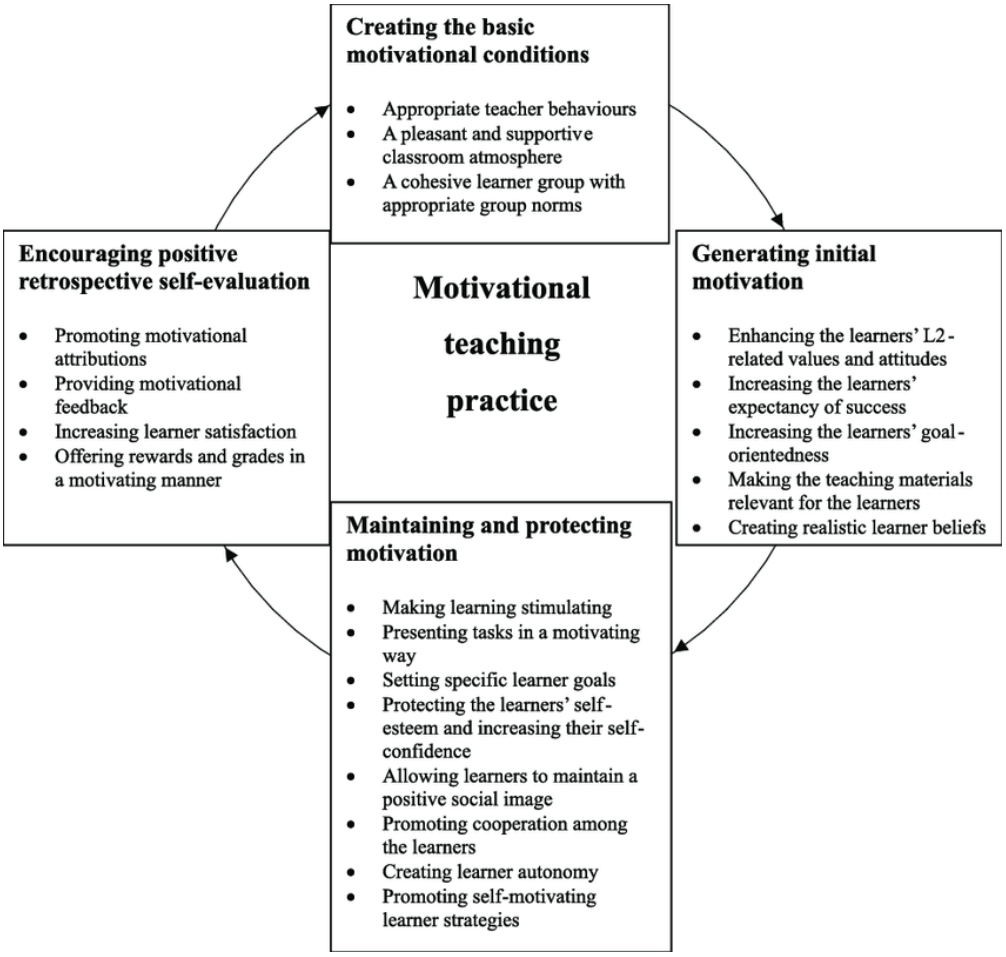

図 1. Dörnyei (2001)による process oriented model

Dörnyei & Csizér (1998)および Dörnyei (2001)の motivational strategies は，その後，多くの研究で引用され，国内外で研究が進められてきた。近年の国外の motivational strategies の研究動向については，Li (2020)が体系的なレビューを行っている。Li (2020)は 2000 年から 2019 年に Social Sciences Citation Index (SSCI) database に所収された研究論文から 10 編の論文（Alrabai, 2014; Chen & Dörnyei, 2007; Dörnyei & Csizer ,1998; Guilloteaux & Dörnyei, 2008 , Lee & Lin, 2019; Lee, Gardenr & Lin, 2019; Papi & Abdollazadeh, 2012; Sugita McEown & Takeuchi, 2014; Wong, 2014）を抽出し，それらの研究成果と今後の motivational strategies の研究課題を提示した。Li (2020)は motivational strategies に関する論文を「実験研究」,「調査研究」,「開発研究」の 3 つに分類し，その中でも「調査研究」が最も多くなされている点を指摘した。「調査研究」の中でも最も多く見られた研究は，motivational strategies の使用と動機づけの高さや学習成果などの想定される効果変数との相関関係を扱った質問紙調査（例えば，Guilloteaux & Dörnyei, 2008）であった。また motivational strategies の使用実態とその評価を行う「調査研究」も見られた（例えば，Cheng & Dörnyei, 2007）。一方，motivational strategies の効果を直接測定する「実験研究」では，ランダムサンプリングを伴う実験群と対照群による厳密

な実験研究は見られず，ランダムサンプリングを伴わない準実験研究がわずかに見られたのみだった（例えば，Albrabi, 2014）。

一方，国内の研究でおいても Dörnyei（2020）の(3)「教育場面への理論の応用」に関する研究は多く見られるが（例えば，Yamamoto, 2022），motivational strategies について体系的に網羅したレビュー研究は著者が把握する限りではまだ行われていないようだ。

2. 2　システマティックレビュー

文献調査を網羅的に行い整理する手法として近年英語教育学部分野で注目されている手法の 1 つにシステマティックレビューがある。「システマティックレビュー」（*systematic review*）は 1990 年代から医療分野で用いられてきた文献調査の手法で，The Cochrane Collaboration など代表的な定義が複数存在するが，本研究では「あるテーマに関するすべての研究の収集，批判的吟味，統合におけるバイアスを制限するための策略の応用」（唐 他，2014）とする。特に「統合」のプロセスを量的に行っているシステマティックレビューは「量的システマティックレビュー」（*quantitative systematic review*）と呼ばれ，複数の研究結果を量的に統合する「メタ分析」（*meta analysis*）はそのオプションの 1 つと理解されている。一方，「統合」プロセスを質的に行っている場合は「質的システマティックレビュー」（*qualitative systematic review*）と呼ばれる。

システマティックレビューを用いた英語教育分野の研究としては，Honda *et al.* (2018), Mizumoto, Urano and Maeda (2014)，Stapleton and Collett (2011)，本田 他（2020）などが挙げられる。Honda *et al.* (2018)は関東甲信越英語教育学会の機関誌 *KATE Journal* に所収されている 272 編の論文（1985 年～2017 年）を対象に，本田 他（2020）は小学校英語教育学会の機関誌 *JES Journal* の 189 編の論文（2003 年～2019 年）を対象に，Mizumoto *et al.* (2014)は全国英語教育学会の機関誌 *ARELE* に所収されている 450 編の論文（1990 年～2013 年）を対象に，Stapleton and Collett (2011)は全国語学教育学会の機関誌 *JALT Journal* に所収されている 297 編の論文（1979 年～2008 年）を対象に，各学会誌での研究動向の調査を行っている。これらの研究は，いずれも特定の学会の機関誌を対象に，そこに所収されている論文から当該学会での研究動向を概観している。

そこで本研究は日本国内の motivational strategies の研究動向を探るため，システマティックレビューの手法を用いる。その際，分析範囲を特定の学会誌に絞らずに，CiNii に登録されている我が国の論文まで広げることで，我が国での motivational strategies の研究動向を概観する。

3.　目的

本研究の目的は我が国の英語教育分野での motivational strategies の研究動向の把握である。特に CiNii のデータベースを利用し，そこから過去 10 年間で所収されている論文を整理したうえで，それらの研究動向を分析した上で，先行研究の motivational

strategies の研究成果を統合する試みを行う。

4. 調査

4.1 対象文献の抽出手順

本研究では，国立情報学研究所（NII）の CiNii（NII 学術情報ナビゲータ）を使用し，過去 10 年（2023 年～2014 年）に発行された英語教育分野の motivational strategies に関する論文の抽出を行った。システマティックレビューの手法に則り，3 段階のデータ抽出を行った（表 1 参照）。

第 1 次抽出として，CiNii のデータベースにて motivational strategies とそれに関連するキーワードで検索を行った。英語で記載された論文と日本語で記載された論文の両方を抽出するために，英語と日本語のキーワードで検索を行った。特に日本語検索の際は motivational strategies の訳語の多様性を考慮し，できるだけ多くの検索ワードを準備した。具体的な検索ワードは「motivational strategies, English」,「motivational strategies, EFL」,「motivational strategies, L2」,「動機づけ方略，英語」,「動機付け方略，英語」,「動機づけを高める方略，英語」,「動機づけを高める，方略，英語」,「動機づけを高める，ストラテジー，英語」,「動機づけを高める英語指導ストラテジー」である。その結果，21 件の論文が抽出された。

表 1. 文献抽出の手順

段階	方法	結果
第 1 次抽出	CiNii のデータベースでの検索	21 編
第 2 次抽出	文献を以下の基準で第 1 次スクリーニング ・学会出版物あるいは大学紀要である。 ・本文がオンラインで公開されている	14 編
第 3 次抽出	文献を以下の基準で第 2 次スクリーニング ・論文のタイトル，要旨，および本文から研究目的が motivational strategies であるか	11 編

次に第 2 次抽出として，検索結果から得られた文献のスクリーニングを行った。CiNii の検索結果には，学会発表の要旨，発表論文集，英検などの助成団体からの補助金への成果報告書も含まれていることから，以下の 2 つの条件を満たしているかどうかで絞り込みを行った。

(1) 学会出版物（日本学術会議にて学術研究団体として登録された学会が発行する出版物に収録されている文献）あるいは，大学紀要（大学が発行する研究紀要及び報告書に掲載されている文献）である。
(2) 論文の本文がオンラインで公開されている文献である。

以上の結果，14 編の論文が抽出された。

次に第 3 次抽出として，抽出された論文のタイトル，要旨，および本文から motivational strategies をメインの目的として扱っている論文かどうか判別するスクリーニングを行った。その結果，1 件は teacher motivation を維持・高めるための motivational strategies の研究で，2 件は要旨に motivational strategies の言及があるが，論文自体の目的に motivational strategies が関連していない研究であったので，この 3 編は分析対象から除外した。その結果，11 編の論文（アスコー, 2016; 林田, 2019; Kobayashi, 2014; 古賀, 2022; Leung, 2019; Millington, 2014; Sugiuwa, 2019; 吉住, 2014; 竹内, 2016; Warchulski, 2014; Yamamoto, 2022）が分析対象として抽出された。

4.2 分析プロトコル

次に抽出された 11 編の論文の内容を精査し，システマティックレビューの先行研究（Honda et al., 2018; 本田 他, 2020; Mizumoto *et al.*, 2014; Stapleton and Collett, 2011）および motivational strategies のレビュー研究（Li, 2020）を参照し，4 つの特性（「形式」，「研究対象」，「データタイプ」，「教育的介入の有無」）と，特性ごとのカテゴリーを用いて motivational strategies の研究動向の全体像の把握を行った。

まず形式はリサーチタイプと目的の観点から Li (2020)に基づいて「実験研究」，「調査研究」，「開発研究」の 3 つの種類で分類を行った。

「実験研究」とは，motivational strategies の効果を検討する目的で，実験研究の手法を使って，プレ測定とポスト測定を使ながら動機づけの変動を統計的に検討する研究である。

「調査研究」とは，motivational strategies の使用実体や有用性の評価を目的に質問紙調査などのデータから調査を行う研究である。

「開発研究」は動機づけ理論に基づきながら motivational strategies の開発を目的にした研究で，先行研究での研究成果や動機づけ理論に基づく考察が中心になる。

しかし各論文を上記の基準で精査した結果，Li (2020)の分類に当てはまらない論文が多数見られた。そこで本研究では Li (2020)の分類に加え，抽出された論文からボトムアップ的に新たなカテゴリーを創出した。それらは「概説」と「実践の省察と提言」である。「概説」とは応用言語学研究の入門者や中高の英語教員を対象にした先行研究の概略を解説した論文である。「実践の省察と提言」とは著者自身の教育実践を motivational strategies の観点から授業改善しようとする研究である。

また 11 編の論文の内，著者自身の教育活動の一環として学習者の動機づけの変動をプレ測定とポスト測定で検討している研究もあった。介入による動機づけの変動をプレ測定とポスト測定で統計的に検討している点では「実験研究」の要素もあり，また自身の教育活動に対する学生の評価という点では「実践の省察と提言」の要素もあった。そこで，本研究では該当研究のデータ収集デザインに着目し，上記を区別した。まず測定する質問紙に着目し，それが心理尺度かどうかで「実験研究」と「実践の省察と提言」を区別した。つまり動機づけという心理概念である潜在変数を観測変数から測定する場合，1 つの概念を最小でも 3 項目で測定する必要がある（Costello & Osborne, 2005）。この基準に合致しない測定器具を用いている場合は「実験研究」に該当しないと考え，「実践の省察と提言」と見なした。「実験研究」に必要なデータ収集デザインには，他にもサンプリングや要因の事前統制など多様な条件があるが，本研究ではまずは尺度の観点からスクリーニングを行った。その結果，対象となったすべての研究で「実験研究」と「実践の省察と提言」が判別可能であった。

次に「研究対象」「データタイプ」「教育的介入の有無」については，システマティックレビューの先行研究（Honda et al., 2018; 本田 他, 2020; Mizumoto *et al.*, 2014; Stapleton and Collett, 2011）に基づいて各カテゴリーを設定した。「研究対象」のカテゴリーは「中学生」「高校生」「大学生」「その他」とし，「データタイプ」のカテゴリーは「量的」「質的」「混合」「その他・なし」とし，「教育的介入の有無」のカテゴリーは「有」「無」とした。以上の分析プロトコルは以下の表 2 のとおりである。

表 2. 分析プロトコル

特性	カテゴリー
形式	「実験研究」，「開発研究」，「調査研究」，「概説　」，「実践の省察と提言」
研究対象	「中学生」，「高校生」，「大学生」，「その他」
データタイプ	「量的」，「質的」，「混合」，「その他・なし」
教育的介入の有無	「有」，「無」

5. 結果

5.1 全体傾向の把握

motivational strategies の研究の全体傾向を把握するため，抽出された 11 編の論文を「リサーチタイプと目的」の観点から分類を行った。その結果，表 3 の結果が得られた。

過去 10 年で最も多く行われた motivational strategies の研究は「実践の省察と提言」の 5 件であった。次に多かったのが「調査研究」および「概説」で，各 3 件だった。一方，「実験研究」と「開発研究」は 0 件であった。なお国際誌の調査を行った Li (2020) では「調査研究」が最も多く 6 件で，「実験研究」と「開発研究」が同数の 2 件だった。

国際誌という性質上,「概説」と「実践の省察と提言」は見られなかった。

以上の点から，我が国の英語教育分野での motivational strategies の研究は，研究成果を著者自身が自分の教育実践に取り入れ,授業改善を行う応用研究が多く行われていることが示された。一方で，国際誌でみられる動機づけ理論から motivational strategies を開発する研究や開発された motivational strategies の効果を実験研究で検証する，いわば基礎研究に該当する研究は見られなかった。

表 3. 「リサーチタイプと目的」による分類

	実験研究	調査研究	開発研究	概説	実践の省察と提言
本研究	0	3	0	3	5
Li (2020)	2	6	2	-	-

次に「研究対象」,「データタイプ」,「教育的介入の有無」の 3 つの特性から motivational strategies の 11 編の研究の分類を行った。なおこれら 3 つ特性は *ARELE* 所収論文のシステマティックレビューを行った Mizumoto *et al*. (2004)に準拠したプロトコルを用いて，本研究との比較を行うこととした。なお Mizumoto *et al*. (2004)のターゲットは motivational strategies という特定の研究領域に特化せずに，英語教育全体の傾向を把握することだが，この比較を通して motivational strategies の研究動向が英語教育全体でどのように位置づけられるかが把握できると考えられる。

システマティックレビューの結果，表 4 の結果が得られた。11 編の motivational strategies の研究のうちデータ収集が行われた研究は 6 編であった。6 編すべての研究で大学生を対象にデータ収集を行っており，そのうち 2 編は教員にもデータ収集を行っていた。次にデータタイプについては，量的が 3 編，質的が 1 編，混合が 2 編であった。ただ motivational strategies の研究の多くは「実践の省察と提言」であったため，データ収集の方法は心理測定尺度よりは授業評価アンケートの形式が多くを占めていた。介入の有無については，介入有が 2 編，無が 4 編だった。

表 4. 「研究対象」,「データタイプ」,「教育的介入の有無」による分類

	対象				タイプ				介入	
	中	高	大	他	量	質	混	他	有	無
本研究	0	0	7	2	2	2	3	-	2	5
Mizumoto *et al*. (2004)	45	82	211	-	341	13	31	28	84	329

対象について Mizumoto *et al*. (2004)と比較すると，motivational strategies の研究は多

くが大学生が占めているのに対し，*ARELE* 所収論文では大学生が多いものの，その他の年齢層の学習者にも研究の範囲が広げられていた。タイプについては motivational strategies の研究は量的，質的，混合がまんべんなく用いられているのに対して，Mizumoto *et al*. (2004)では量的が圧倒的に多いという結果であった。介入の有無については，両研究とも介入無が介入有よりも多い結果だった。

5.2　motivational strategies の有効性

次に 11 編の論文のうち，motivational strategies の有効性を調査した論文に焦点を当て，日本人英語学習者に有効だと考えられる motivational strategies の抽出を行った。motivational strategies の有効性を調査した論文は「調査研究」で 3 編，「実践の省察と提言」で 1 編であった。これら 4 つ論文ではすべて Dörnyei (2001)の 35 の motivational strategies を使用していた。

ただし，そのうちの 1 編の論文は 5 件法の質問紙調査で motivational strategies の評価を行ったが，1～2 が否定的回答，3～5 が肯定的回答となっている点，各質問項目が Dörnyei (2001)のどの motivational strategies に該当するのか明記されていなかった点を考慮し，分析から除外とした。その結果，3 つの論文（アスコー，2016; Kobayashi, 2014; Yamamoto, 2022）を分析対象とした。

対象になった 3 つの論文の内，2 件は motivational strategies の有効性を大学生対象に質問紙調査を行った研究であった。もう 1 件は動機づけが高まった授業を行った教員に対して半構造化インタビューを行い，得られた motivational strategies の有効性に関する質的データを Dörnyei (2001)に基づいて分類した研究だった。

3 つの論文で得られた結果を統合した結果，35 個の motivational strategies の内 20 個の motivational strategies の有効性が支持されたことが明らかになった（表 5 参照）。具体的には，3 つの研究すべてで有効性が支持された motivational strategies は 1 個のみで，2 つの研究で有効性が支持されたのは 10 個，1 つの研究で有効性が支持されたのは 9 個であった。

まず，3 つの研究すべてで有効性が支持された motivational strategies は 1 つのみで，それは基礎的な環境を作る motivational strategies の中の C6「集団の結束を強化する」だった。

次に 2 つの研究で有効性が支持されたのは，基礎的な環境を作る motivational strategies では，C1「扱う教材に対する自分の熱意と，それが自分に個人的にどんな影響を及ぼしているかについて，実例を挙げて説明する」，C3「生徒と個人的な関係を築く」，および C5「教室に楽しく，支援的な雰囲気を作る」だった。授業開始時の motivational strategies では，G10「L2 学習過程に対する学習者の内在的な関心を高める」と G15「教育課程と教材を，学習者に関連の深いものにする」であった。動機づけを維持する motivational strategies では，M17「教室内での活動が単調にならないように，学

習をより興味深く楽しくする」と M23「学習者に定期的な成功体験を与える」であった。最後の肯定的な自己評価を促進するための motivational strategies では，E32「肯定的情報フィードバックを学習者に与える」，E33「学習者の満足感を高める」，および E35「動機づけを高める方法で評点を用いる。評点の持つ動機づけを失わせる衝撃をできる限り少なくする」であった。

表 5. motivational strategies の有効性の評価の比較

process-oriented model	motivational strategies	Yamamoto (2022)	アスコー（2016）	Kobayashi (2014)	計
C	6	○	○	○	3
C	1	○	○		2
C	3	○	○		2
C	5	○	○		2
G	10	○	○		2
G	15		○	○	2
M	17	○	○		2
M	23	○	○		2
E	32	○		○	2
E	33	○	○		2
E	35	○	○		2
C	2	○			1
G	9		○		1
G	11		○		1
G	13	○			1
M	18			○	1
M	20	○			1
M	21	○			1
M	25		○		1
M	27		○		1

Note. 各 motivational strategies の通し番号とその内容の詳細は Appendix 参照

最後に 3 つのうちいずれか 1 つの研究で有効性が支持されたのは，基礎的な環境を作る motivational strategies では C2「生徒の学習を真剣に受けとめる」のみだった。授業開始時の motivational strategies では，G9「仲間のお手本を見せることで，言語に関連する価値観を高める」，G11「L2 とその使用者，また外国人らしさ全般に対する肯定的

で開放的な気質を育てることで，統合的価値観を高める」，および G13「特定の課題および学習全般に関する生徒の成功期待感を高める」であった。動機づけを維持する motivational strategies では，M18「タスクの魅力を増すことで，学習を学習者にとって興味深く楽しいものにする」，M20「動機づけを高める方法でタスクを提示し，実施する」，M21「教室で目標設定の手法を用いる」，M25「学習環境において不安を誘発する要素を取り除き，あるいは緩和することによって，言語不安を軽減することを支援する」および M27「学習者が学習課題に取り組んでいるときに，肯定的な社会的心象を保持することを可能にする」であった。最後の肯定的な自己評価を促進するための motivational strategies での該当はなかった。

6. 考察

本研究はシステマティックレビューという手法を用いて我が国の過去 10 年での motivational strategies の研究動向を概観した。

まず我が国の過去 10 年で最も多く行われた motivational strategies の研究は「実践の省察と提言」で，研究者が授業実践者として motivational strategies を自身の授業実践の中に取り入れる方法を検討し，その成果を授業評価アンケートなどから省察する内容だった。これは CiNii で抽出された論文の多くが大学紀要に所収されていたことに関連していると考えられる。

また Li (2020)の国際誌のレビュー研究の結果でも見られた motivational strategies の有効性の評価を行う研究が我が国の研究でも見られた。具体的には 716 名の大学生を対象にした大規模な質問紙調査から motivational strategies の評価を行った研究（アスコー，2016），動機づけを高める効果が得られた授業の実践者に対して半構造化インタビューを行い，質的データから有効な motivational strategies を抽出した研究（Yamamoto, 2022），そして自らの授業実践に motivational strategies を取り入れて授業評価アンケートから有効性を検討した研究（Kobayashi, 2014）が挙げられる。

これらの研究で得られた結果を質的システマティックレビューで統合したところ，Dörnyei (2001)が提示する 35 の motivational strategies の内，日本人大学生の英語学習者に有効と評価できる motivational strategies は 20 個であった。中でも 3 編すべてで評価が高かった motivational strategies は「集団の結束を強化する」（C6）だった。

近年の大学教育ではアクティブラーニング型授業が重視されており，授業内でペアワークやグループワークを使いながら，プロジェクト型学習，協調学習，協同学習などが行われている。グループでの学習において，学習者同士が充実した学習体験を得るには，グループに学習者がうまく溶け込み，活発なコミュニケーションを行うことで，学習者同士が学びあえる雰囲気作りが大切である。システマティックレビューの結果，同様のグループダイナミックスに関連した motivational strategies として，「教室に楽しく，支援的な雰囲気を作る」（C5）も有効性の評価が高い motivational strategies として本研究

から得られた。以上の結果から，グループやクラスの雰囲気作りという基礎的な環境を創出することが，日本人英語学習者に有効な motivational strategies と考えられる。

また有効性評価が高かった他の motivational strategies に着目すると，学習者の内発的動機づけに関連する motivational strategies も見られた。具体的には「教室内での活動が単調にならないように，学習をより興味深く楽しいものにする」（M17），「タスクの魅力を増すことで，学習を学習者にとって興味深く楽しいものにする」（M18），「動機づけを高める方法でタスクを提示し，実施する」（M20）である。学習者の興味や関心をひき，内発的動機づけを高めることの重要性は広く認知されている一方で，どのように興味や関心をひいて内発的動機づけを高めるか，という具体的な方法については多くの教員の悩みでもあろう。

内発的動機づけを高める具体的方法のヒントになる motivational strategies は，システマティックレビューで得られた「教育課程と教材を，学習者に関連の深いものにする」（G15）である。この motivational strategies の理論背景になっているのは「期待×価値理論」（*expectancy* × *value theory*, Wigfield and Eccles, 2000）である。「期待×価値理論」は学習者が学習に対して見いだす「価値」（*value*）の質に着目した動機づけ理論で，その中で提唱されている「実用価値」（*utility value*）は「現在の学習が将来のために役立つと位置付ける認知」（鈴木・櫻井，2001）と定義される。この実用価値が学習者の自己に取り入れられ，十分に内在化されていれば，学習者は内発的に動機づけられた状態にあると見なされる（Bradshaw, 2023; Vansteenkiste, Lens, & Deci, 2006）。つまり学習者が持つ目標などの実用価値に沿った教材，アクティビティやタスクを取り入れることで，学習者を内発的動機づけに導くことができると考えられる。

以上の結果から，教育課程，学習事項，教材，タスク，アクティビティなどを学習者の内在的な目標などの実用価値と関連づけることで，学習者の興味関心をひくという motivational strategies が日本人英語学習者に有効と考えられる。

7. 今後の課題

最後に本研究の限界点について述べておく。第 1 に本研究はシステマティックレビューの手法を用いて motivational strategies を扱っている研究を CiNii から網羅的に抽出した。第 1 次抽出はできるだけ多くの論文を対象にできるように多様なキーワードを用いて検索した。しかし motivational strategies を中心に扱いながらも，タイトル，アブストラクト，そして論文キーワードに motivational strategies，あるいはその訳語を含めていない論文は CiNii の検索システムのアルゴリズムでは抽出できなかった。今後はハンドサーチなども含めながら，より網羅的に論文を抽出する必要があろう。第 2 に本研究は motivational strategies の有効性の評価として最大公約数の発想を用いながら質的な結果の統合を行った。今後はメタ分析なども用いてながら，統合の方法をより多様化する必要があろう。

謝辞

本研究は科研費 22K00834 の支援を受けた研究である。

参考文献一覧

Alrabai, F. (2016). The effects of teachers' in-class motivational intervention on learners' EFL achievement. *Applied Linguistics, 37*, 307–333.

アスコー明子（2016）．「小学校教員免許履修学生が考える英語学習動機付けー動機付けストラテジー質問用紙からの考察ー」．『国際経営・文化研究』, *21*, 229-254.

Boo, Z., Dörnyei, Z., & Ryan, S. (2015). L2 motivation research 2005-2014: Understanding a publication surge and a changing landscape. *System, 55*, 145–157.

Bradshaw, E. L. (2023). Causes, costs, and caveats: Reflections and future directions for goal contents theory. In R. M. Ryan (Ed.), *The Oxford handbook of self-determination theory* (pp. 139–159). Oxford University Press.

Cheng, H.-F. & Dörnyei, Z. (2007). The use of motivational strategies in language instruction: The case of EFL teaching in Taiwan. *Innovation in Language Learning and Teaching 11*, 153–174.

Costello, A. B., & Osborne, J. (2005). Best practices in exploratory factor analysis: Four recommendations for getting the most from your analysis. *Practical Assessment, Research and Evaluation, 10*, 1–9.

Dörnyei Z. (2001). *Motivational strategies in the language classroom*. Cambridge University Press. （ドルニェイ, Z. 米山朝二・関昭典（訳）（2005）．動機づけを高める英語指導ストラテジー35. 大修館書店）.

Dörnyei, Z. (2020). *Innovations and challenges in language learning motivation*. Routledge.

Dörnyei Z. & Csizér, K (1998). Ten commandments for motivating language learners: Results of an empirical study. *Language Teaching Research, 23*, 203–229.

Guilloteaux & Dörnyei, Z. (2008). Motivating language learners: A classroom-oriented investigation of the effects of motivational strategies on student motivation. *TESOL Quarterly, 42*, 55–77.

林田朋子（2019）．「授業力向上のための英語指導実践の省察ー動機づけを高めるための英語指導ストラテジーを用いてー」．『現代社会学部紀要』, *18*, 105–116.

Honda, K., Hoshika, M., Aoyama, T., Someya, F., & Yamamoto, T. (2018). A systematic review of articles in KATE 1–31: Changing trends in the field of English education. *KATE Journal, 32*, 85–98.

本田勝久・田所貴大・星加真実・染谷藤重（2020）．「小学校英語における研究動向―JES Journal のシステマティックレビュー」. *JES Journal, 20*, 351-366.

唐文涛・小島原典子・河合富士美・津谷喜一郎（2014）．「診療ガイドラインとシステマティック・レビュー」．『薬理と治療』, *42*, 189–197.

Kobayashi, K. (2014). Student reactions to content-based instruction in EFL reading classes: A survey on motivational strategies. 『大阪女学院短期大学紀要』, *44*, 31–44.

古賀功(2022).「基本的欲求と動機づけ:教師が使用する動機づけ方略の考察」.『KELES ジャーナル』, *7*, 46-53.

Lee, T. S., Gardner, D., & Lau, K. (2019). The effects of L2 motivational strategies: Within and beyond the L2 classroom. *Innovation in Language Learning and Teaching*, *14*, 1–15.

Lee, T. S., & Lin, S. Y. (2019). English teachers' uses of motivational strategies beyond an established framework. *Educational Research, 61*, 1–18.

Leung, R. C. Y. (2019). Teacher-orientated pedagogical practices for reducing demotivation in English language learning contexts in Japan. 『実践女子大学 CLEIP ジャーナル』, *5*, 9-20.

Li, H. (2020). Motivational strategies in English as foreign language teaching: A research review. *INTESOL Journal 17*, 137–154.

Mizumoto, A., Urano, K, & Maeda, H. (2014). A systematic review of published articles in ARELE 1–24: Focusing on their themes, methods, and outcomes. *ARELE, 25*, 33–48.

Millington, N. T. (2014). Using personalized narratives as motivational strategies. 『国際情報学部研究紀要』, *14*, 97-105.

Papi, M. & Abdollahzadeh, E. (2012). Teacher motivational practice, student motivation, and possible L2 selves: An examination in the Iranian EFL context. *Language Learning, 62*, 571–594.

Stapleton, P., & Collett, P. (2010). JALT Journal turns 30: A retrospective look at the first three decades. *JALT Journal, 32*, 75–90.

Sugita McEown, M., & Takeuchi, O. (2014). Motivational strategies in EFL classrooms: How do teachers impact students' motivation? *Innovation in Language Learning and Teaching, 8*, 20–38.

Sugiura, E (2019). What motivational strategies can teachers use to encourage reading in an L2 for pleasure? 『名古屋短期大学研究紀要』, *57*, 81–92.

吉住香織（2014）．「Motivational strategies と生徒の英語学習意欲：学習者はどのような指導を動機づけに効果的と考えるか」．『國學院大學教育開発推進機構紀要』, *5*, 37–60.

竹内理（2016）．「英語学習の動機を高め、維持するには：動機づけ要因と動機づけ方略の観点から」. *JACET Kansai Journal*, *18*, 36–51.

田中博晃（2010）．「英語の授業で内発的動機づけを高める研究」. *JACET Journal*, *50*, 63–80.

廣森友人（2014）．「学習者の動機づけと英語熟達度が動機づけ方略への認識に与える影響」．『立命館言語文化研究』, *22*, 159–167.

Vansteenkiste, M., Lens, W., & Deci, E. L. (2006). Intrinsic versus extrinsic goal contents in self-determination theory: Another look at the quality of academic motivation. *Educational Psychologist, 41*, 19–31.

Warchulski, D. (2014). Accounting for learners' positive behavior using a motivational strategies framework. *New Directions in Teaching and Learning English Discussion*, *2*, 187–193.

Wigfield, A., & Eccles, J. S. (2000). Expectancy-value theory of achievement motivation. *Contemporary Educational Psychology, 25*, 68–81.

Wong, R. M. (2014). An investigation of strategies for student motivation in the Chinese EFL context. *Innovation in Language Learning and Teaching, 8*, 132–154.

Yamamoto, J. (2022). A Comparison of two different types of motivational strategies: A case study of two EFL instructors. *International Journal of Curriculum and Development*, *25*, 43–56.

Appendix. Dörnyei (2001)による 35 の motivational strategies

C. 動機づけの基礎的な環境を作る motivational strategies

1．教材に対する教員の熱意と，それが自分に与えた影響を実例で説明し解説する。

2. 生徒の学習を真剣に受け止める。

3. 生徒と個人的な関係を築く

4. 生徒の親たちと協力関係を築く。

5. 教室に楽しく，支持的な雰囲気を作る。

6. 集団の結束強化を促進する。

7. 明示的な集団規範を作成して，生徒と話し合い，認めてもらう。

8. 集団規範をしっかりと守らせるようにする。

G. 学習開始時の動機づけの喚起する motivational strategies

9. 仲間のお手本を見せることで，言語に関連する価値観を高める。

10. L2 学習過程に対する学習者の内在的な関心を高める。

11. L2 とその使用者，また外国らしさ全般に対する肯定的で開放的な気質を育てることで，「統合的」価値観を高める。

12. L2 知識と結びついた道具的価値観に対する生徒の理解を高める。

13. 特定の課題および学習全般に関する生徒の成功期待感を高める。

14. 生徒が認める明確な教室目標を立てることで目標志向性を高める。

15. 教育課程と教材を学習者に関連の深いものにする。

16. 現実的な学習者信念を作る手助けをする。

M. 動機づけを維持し保護する motivational strategies

17. 教室内での活動が単調にならないように，学習をより興味深く楽しくする。

18. タスクの魅力を増すことで，学習を学習者にとって興味深く楽しくする。

19. 学習者をタスクへの積極的な参加者になるように求めることで，学習を興味深く楽しくする。

20. 動機づけを高める方法でタスクを提示し，実施する。

21. 教室で目標設定の手法を用いる。

22. 生徒の目標に向けた情熱を形式化するため，生徒と契約手法を用いる。

23. 学習者に定期的な成功経験を与える。

24. 定期的に励ましを与えることにより，学習者の自信を育む。

25. 学習環境において不安を誘発する要素を除き，あるいは緩和することによって，言語不安を軽減することを支援する。

26. 学習者に多様な学習ストラテジーを教えることにより，自己の学習能力に対する自

信を構築する。

27. 学習者が学習課題に取り組む時に，肯定的な社会的心象を保持することを可能にする。

28. 学習者間の協力を促進することにより，生徒の動機づけを高める。

29. 学習者の自律性を積極的に促進することで生徒の動機づけを強化する。

30. 学習者の自己動機づけ能力を強化する。

E. 肯定的な自己評価を促進する motivational strategies

31. 学習者の中に努力帰属を高める。

32. 肯定的情報フィードバックを学習者に与える。

33. 学習者の満足感を高める。

34. 動機づけを高めるように報酬を与える。

35. 動機づけを高める方法で評価を用いる。評点の持つ動機づけを失わせる衝撃をできる限り少なくする。